

博物館におけるモノとヒトとのかかわりについての一考察

——広島平和記念資料館の事例から——

大西 万知子

ONISHI Machiko

問題提起

近年、博物館では、資料をガラスケースの中に置いて見せる伝統的な展示方法に加えて、触れる展示、映像展示やデジタル展示などの新しい展示方法が多く見られるようになった。これらの新しい展示方法は、資料からより多様な情報をひきだし、より多様な形で来館者と博物館をつなぐことを意図している。博物館資料から情報を引き出す技術的側面が急速に発達している今日の状況で、非文字資料研究の一つとして、モノそのものに託されたヒトの活動、感覚や感情を明らかにしていくことも大切なのではないだろうか。この論考では、広島平和記念資料館に集められた資料をもとに、モノとヒトの関係を考察していく。

1 モノとヒト 記憶の場所

記憶は、一般に、はかなく、歪曲されやすく、そして実体がないと考えられている。記憶は、しかし、社会や人の心の中に文字、音、物、人や場所を通じて、長期に留まることができる。場所を通じた記憶は、目に見える形となり、風景となる。記憶は、過去から情報を引き出し、思い出し、そしてそれを現す能力、また、個人の過去につながる方法と述べられている (Kavanagh 1996: 7; Luber 1997: 15)。記憶は、また、過去からの個人的な記憶だけでなく、集合的な記憶があるとも言われている。Maurice Halbwachs (モーリス・アルヴァックス) (1877-1945) は、その記憶は、与えられるものでなく、社会的に構築されたものであり、それは、例えば、記念碑や家族の思い出と述べている (小関 1989)。

第2次世界大戦後、戦争に関する記憶の場所は、

人々と社会に多くの戦争体験を伝え、その記憶を次の世代へ伝えていく重要な役割を持っているように思える。なぜなら、20世紀は、その前世紀と異なる事実——兵士だけでなく、市民や子供さえも含む大量の死をもたらし、そして極度に破壊的な力が、環境、文化遺産、人類に対して放たれた世紀だからである (広島平和記念資料館 1999)。これらの20世紀の戦争に関する記憶の場所は、基本的に対話的な性質をもち、記憶を共有できる場所、言い換えれば、これらの場所は、国境や文化の違いを超えて、すべての人に開かれていることが望まれる。しかし、これらの場所は、外的な力や内的な要素を避けることができない。今日、これらの記憶の場所は、様々な論議を呼んでいる。

例えば、第2次世界大戦後、何百万人のユダヤ人の虐殺や広島原爆投下は、第2次世界大戦前、戦中の悲劇的な体験として、しばしば社会の記憶として呼び起こされていた。しかし、この社会の記憶は、次第に、異なる形で記憶の場所へ融合されているように考えられる。その違いは、その出来事が西洋と東洋の間に起き、特別な民族もしくは場所に起きたからだ、簡単には答えられない。ホロコーストについての記憶の場所の場合、ヨーロッパ、イスラエル、アメリカ合衆国へと広がっている。しかし、近年、Rachel Whiteheadによるウィーンにあるホロスコースト記念碑 (ユダヤ人のための記念碑) は、その記念碑のデザインについて論議を起した (図1)。同氏の記念碑は、記憶の保管場所である図書室の形をしている。しかし、その図書室の本は、永遠に借り出せないように考案されている。同氏は、記憶は、ただ忘却の基礎によって成り立つという観念から、記念碑を通じて忘却することの大切さを表現する。似たような考えを反映す

る記念碑に、ドイツの新しい世代によって作られたものがある。この記念碑は、ある出来事を記憶することの大切さと直接体験していない事実を思い出すことへの不可能を表現する(図2)。Young (1993)は、記念碑を成り立たせる物質は、通常、時間の物理的破壊に対して抵抗するものであり、その物質を通じて、記憶は永遠に形として存在できると説明する。しかし、記念碑が永続的に存在することは、結果的に、時間を超えて「死の記憶」が永久に存在することを意味する。この記念碑は、物を通じて、その記憶が、長期、存在することを否定する。

これらの記念碑は、Forty (1999)が指摘しているように、戦後に現われたつらい記憶を拒絶する「忘却」の表現である。

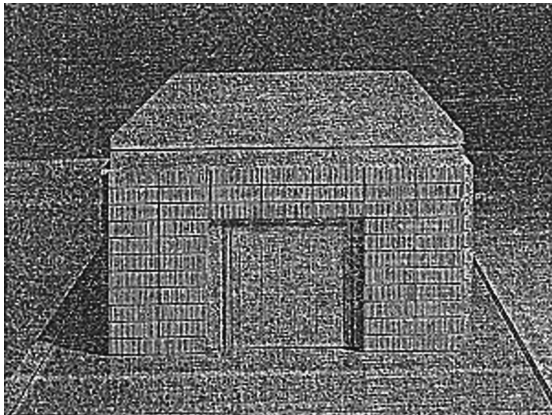


図1 ユダヤ人のための記念碑(ウィーン)
考案者 Rachel Whiteread
写真 Mike Bruce (Forty 1999: 12)

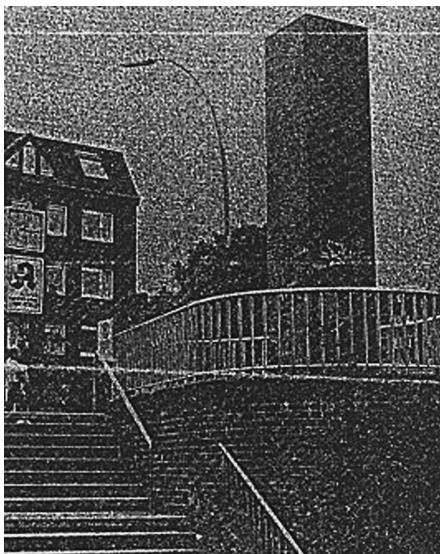


図2 ドイツの「消失」の記念碑
考案者 Harburg
写真 James E. Young (Young 1993: 36)

一方、広島原爆投下に関する記憶の場所も、近年、大きな論議を呼んだ。それは、1995年のアメリカ合衆国ワシントンD.C.にあるスミソニアン国立航空宇宙博物館のB29爆撃機エノラ・ゲイの展示である(図3)。この論議とは、広島に原爆を投下したB29爆撃機エノラ・ゲイの展示が、退役軍人、政治家、歴史家やマスメディアにより展示内容の修正を余儀なくされたことである。Hogan (1996)は、その戦争をその後9日間で終わらせた事実より、その爆弾の効果や原爆の爆心地においての死と破壊が強調されており、日本からの攻撃の記録がなく、戦争で命を落とした兵士たちの経験を軽んじるものと指摘している。Kavanagh (2000)は、また、この論議は、20世紀後半に存在する国粹主義、戦争、キュレーターシップについての考えを反映する証拠と指摘している(Kavanagh 2000: 107)。

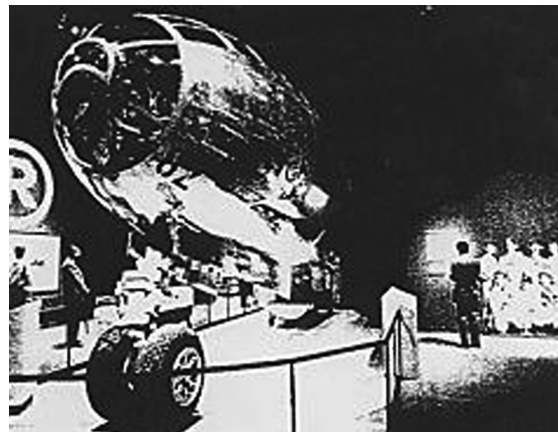


図3 B29爆撃機エノラ・ゲイの展示 スミソニアン国立航空宇宙博物館(写真: 共同通信社提供) 井上ひさし「人類史の「折り返し点」『the 座』第53号3項から引用。

この論議は、広島原爆の別の角度、広島での出来事は、純粋に「悲劇」ではなく、それは、軍事同盟の勝利を圧倒し、日本の攻撃を終わらせた「偉業」であると今日、考えられていることを意味している(Rotblat 1997: xvii)。広島で起きた出来事は、戦争を早く終わらせるため、そして生存者を救うために原爆投下したという正当化、死と破壊を見せた科学の道、爆弾は本当に戦争を終わらせたかという政治的、人道的論議をも含んでいる(Buruma 1995: 105; Evans & Lunn 1997: xv; Rotblat 1997: xvii)。さらに、この出来事は、全滅できる爆弾の優勢、核時代、核戦争の現実の兆しという時代の転換期から離れるこ

とができない。

記憶の場所である博物館は、一般に、すべての人に開かれ、公的福祉を追求し、社会へ貢献する機関と位置づけられている。また、博物館は、学術調査や文化遺産の保護の役割を担う傍ら、観光産業や消費文化の一端も担っており、その活動は多岐にわたっている。博物館の定義は、いくつか異なって存在する。日本では、1951年に公布された博物館法第2条では、「博物館とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、リクエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」とされている。

他の定義には、たとえば以下のようなものがある。

ICOM (International Council of Museums) 国際博物館会議による定義：‘A non-profit-making, permanent institution, in the service of society and its development, and open to the public, which acquires, conserves, researches, communicates and exhibits, for the purposes of study, education and enjoyment, material evidence of man and his environment (Ambrose & Paine 1994: 15).’

英国博物館協会の定義：‘A museum is an institution which collects, documents, preserves, exhibits and interprets material evidence and associated information for the public benefit (Ambrose & Paine 1994: 15).’

米国博物館協会の定義：‘A non-profit permanent, established institution, not existing primarily for the purpose of conducting temporary exhibitions, exempt from federal and state income taxes, open to the public and administered in the public interest, for the purpose of conserving and preserving, studying, interpreting, assembling, and exhibiting to the public for its instruction and enjoyment objects and specimens of educational and cultural

value, including artistic, scientific (whether animate or inanimate), historical and technological materials. Museums thus defined shall include botanical gardens, zoological parks, aquaria, planetaria, historical societies, and historic houses and sites which meet the requirements set forth in the preceding sentence (Ambrose & Paine 1994: 16).’

今日、博物館は、以前の「ものの命の終焉の地」、「時間を越えたものの貯蔵庫」、日常生活で実的に価値を失ったものの行き着く意味としての「博物館行き」という静的なイメージの場から論議や対話のための動的な場所へと変化してきている（吉田 1999: 3; 石森 2003: 11）。スミソニアン国立航空宇宙博物館に見られたような展示に関する論議をはじめ、世界の民族学博物館や美術館での異文化の表象問題、博物館の収集品にかかわる歴史性および政治性への関心は、博物館資料の存在が、より重要になってきていることを意味する。

博物館法第2条によれば、博物館資料とは、博物館が収集し、保管し、又は展示する資料と定義されている。また、資料の価値を引き出す（研究）することにより、はじめて博物館資料となることも指摘されている（加藤 1996: 164; 青木 1997: 17）。そして、展示とは、単なるものの陳列の場ではなく、ひろげて示すことであり、そこには意味と目的を持って、人に積極的に見せようという意識があり、コミュニケーションの一形態と述べられている（倉田・矢島 1997: 181）。そのため、博物館資料は、モノからヒトが共有できる記憶を作り出す場所の中で、メッセージを持つ。

広島平和記念資料館は、広島市の広島平和記念公園の中にある。この公園は、原子爆弾の投下地に位置している。この公園は、広島平和記念資料館、原爆死没者慰霊碑（広島平和都市記念碑）、平和の灯、原爆ドームを一本の線をつないだ構成になっている。また、この公園は、慰霊碑や記念碑などの建造物が多く存在する。2002年8月1日からは、この公園内において、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館が、一般公開されている。この公園は、戦前、中島本町、天神町、材木

町、元柳町が存在し、店や住宅などがあった場所である。この公園の考案者は丹下健三氏、この案は、広島市によって145案の中から選ばれた(Kawamoto 1993:14)。

広島平和記念資料館は、1955年8月、原爆によって被害の実相を世界中の人々に伝え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与するために設立された(広島平和記念資料館1999:4)。この資料館には、毎年、百万人以上の人が訪れており、2002年8月19日には、通算、5千万人に達した(財団法人広島文化センター2002:4)。広島平和記念資料館は、多くの資料を保存、展示している。この資料館は現在、13,000点以上の資料を収蔵している。原子爆弾の投下直後のその時から、弁当箱や学生服などの人々の暮らしの普通の物や、爪や髪の毛などの人々の身体は、被爆した物的な証拠となり、また、科学的な調査の対象となり、そして博物館資料となった(図4)。



図4 異形のツメ(高橋昭博氏寄贈)(広島平和記念資料館1999:74)

2 平和の理念の中に生きる「博物館資料」

広島平和記念資料館は、世界に広がっている平和博物館の一つである。平和博物館は、20世紀の戦争体験に関する資料によって、平和のための教育や平和の実現にむけて大きな役割を果たしている。博物館の中で、特に、平和博物館は、戦争に関する出来事を記憶する。平和博物館の設立は、1900年初頭から見られるようになった。例えば、1902年、スイスのJean de Blochによる反戦博物館や、1925年(Duffyによれば、1923年)、ベルリンのErnst Friedrich(エルンスト・フリードリッヒ)による反戦博物館がある(Duffy 1993; 西田・平和研究室編1995)。両館は、戦

争によって破壊された(Duffy 1993; 西田・平和研究室編1995)(図5)。Friedrichによる反戦博物館は、初期のナチスによる弾圧の犠牲となって閉館させられ、彼自身も、スイス、ベルギー、フランスへの逃亡を余儀なくされたが、1982年、彼の孫によりベルリンに再建された。



図5 ベルリンのErnst Friedrich氏による反戦博物館(荒井・早乙女1997:148-149)

戦後、平和博物館は、時に、ヨーロッパ、アメリカ合衆国、日本で発達していった。日本では、1955年の広島平和記念資料館、長崎国際文化会館(のち、1996年、長崎原爆博物館として再建)、1975年の沖縄県平和祈念資料館(2000年に旧資料館を移転改築)、1989年のひめゆり平和祈念資料館や平和資料館・草の家(高知県)、1991年大阪国際平和センター、1992年立命館大学国際平和ミュージアムや川崎市平和館、1993年の埼玉県平和資料館などがある(西田・平和研究室1995)。

特に、平和博物館の設立は、1970年代からの、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の平和文化の概念の発展によって促進された。ユネスコ憲章は、「人の心の中に戦争が始まっている。そのため、国際規模での平和文化のために、平和の砦は、人の心の中に築かなければならない」と述べている(木原1982:160)。ユネスコと平和との強い結びつきの関係は、第2次世界大戦をきっかけとした戦火による文化財破壊の危機への国際的高まりによる。第2次世界大戦で、多数の国内が戦場となり、多数の文化財を失ったヨーロッパ諸国では、戦後、ただちに各国が協力し、対策を模索しはじめた。そうした状況の中で、ユネスコが文化財保護の国際協力の取り決めの中心的役割を担う

ようになっていった。

広島平和記念公園で気づかれることは、「平和」という表現が多数存在することである。例えば、記念碑の表面、記念碑の名前、博物館の理念、平和都市宣言などの中に見つけることができる。例えば、原爆死没者慰霊碑（広島平和都市記念碑）の表面には、「安らかに眠ってください。過ちは、繰り返しませぬから（Let all the souls here rest in peace ; For we shall not repeat the evil.）」と碑文が刻まれている（広島平和記念資料館 1999 : 107）。また、記念碑の名前——「平和の鐘」、「平和の池」、「平和時計塔」、「平和を祈る人のための銅像」、「平和の灯」、「平和の泉」、「平和の塚」、などである。さらに、この場所で気づかれることは、平和という表現に「核兵器廃絶」の実現という表現が組み合わさっていることである。例えば、1947年の第1回平和祭より続いている広島市長による平和宣言は、原爆死没者への追悼、核兵器廃絶、世界恒久平和の実現を訴えている（広島平和記念資料館 1999 : 107）。また、この公園にある旧広島県産業奨励館、通称、原爆ドームも、1996年12月、ユネスコの世界遺産に登録され、Hiroshima Peace Memorial となり、核兵器廃絶と人類の平和を求める誓いの象徴となっている。

この場所を通じての核兵器廃絶による平和の実現という表現は、この場所が被爆体験の地であること、第2次世界大戦後の核脅威による世界秩序の影響によると考えられる。第2次世界大戦後の世界状況は、核軍備競争、核兵器技術と核産業の増加がみられ、世界秩序は、核抑止論に基づいている。1950年代の数々の出来事、例えば、1950年、朝鮮戦争中にトルーマン大統領の原爆を使用する可能性もありうるという声明、その後のアメリカとイギリスの水爆実験、1954年の日本のマグロ漁船、第五福竜丸船が水爆実験の灰を浴び乗組員が被爆した出来事も、平和の実現と核兵器廃絶への強いつながりをもたらした。

この広島の記憶の場所は、「核兵器廃絶による平和の実現」という表現と強く結びついており、特に、民主化に向けて日本が再建されている間、平和という表現は、過去の原爆体験を広島の外へ表現していくのに、また、戦後の日本の新しい社会構造の中へ伝えて

いくのに不可欠な表現だといえる。そのため、広島平和記念資料館の資料は、平和の実現にむけての教育的役割を担う一方で、何万という核兵器が存在する現実の世界に対立する主張の中に存在している。

3 そこでは何が起きたかを伝える「博物館資料」

広島平和記念公園は、物、書類、建物、自然、そして人さえも通して、そこで何が起きたかを伝える歴史的に大切な場所である。今日、この博物館は、私たちにそこで何が起きたか、どのようになぜ起きたか、を生き残りの人々の集めた、寄贈されたもの、レプリカ、模型によって、伝えようと試みている。

この資料館は、1955年の設立後、展示の空間拡張や、博物館展示の解釈の修正を行った（Kawamoto 1993 : 14）。1994年6月1日より、資料館は、前平和祈念館である東館を開き、それは、展示室の拡張だけでなく、視点の拡張をした。それは、広島歴史の観点を1945年8月6日の1日の出来事から、広島が軍都であったことや、加害認識へと視点を広げ、それは、日本へ連れて来られた中国や韓国の人々による強制労働の説明を含んだ。

現在の資料館の展示は、「被爆までの広島」、「廃墟のヒロシマ」、「なぜ広島に原子爆弾が投下されたか」、「戦争・原爆と市民」、「1945年8月6日」、「平和のメッセージ」、「核時代」、「平和への歩み」、「遺品は語る」、「熱線による被害」、「爆風による被害」、「被爆者は語る」で構成されている。

このような状況の中で、近年、海外から、この公園で毎年行われている行事、平和記念式典（原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）について対しての批判が起こされた。その批判とは、この公的である行事は、国レベルであり、この広島の行事を通じて、日本人は何を思い出すのか、彼らは、彼ら自身の残酷な行為を忘れ、罪を忘れ、そして歴史を忘れていているという指摘である（Evans & Lunn 1997, xv ; Buruma 1995 : 107）。

2004年1月現在、広島平和記念公園には、50以上の記念碑や慰霊碑などの建造物がある。これらの建造物は、さまざまな形、材料や媒体から造られている。これらのものは、主に自然石からできている。これらの建造物は、ある出来事や人を後世に伝えるために建

てられた記念碑や、死者の霊魂を慰めるための慰霊碑や供養塔、平和を祈るための碑などである。このような建造物は、この広島平和記念公園のほか、周囲の公園、街角、寺院などにも存在する。西尾（1982）によれば、被爆直後、建てられた木碑は、ほとんど現存せず、当初、木碑であったものは、石碑に造り替えられたもの、場所を変えたもの、あるいは消失したものがあるといふ（西尾 1982：1）。特に、被爆から半世紀という 50 年という節目の年には、その記念事業として、広島市内や県内各地に、慰霊碑や平和記念碑が多く建立された（西尾 2000：245）。

この公園は、原子爆弾の投下地に位置するため、原爆で亡くなった人々の墓地として、また、彼らの死を悼む場所として、大切な場所である。原爆から生き残った広島市民生活は、肉親や知人の消息探しと死者への慰霊から始まった。原爆直下の広島の場所と時間は、「平和」の言葉に基づいた復興事業と同時に、死者の供養と同時であった。資料を通じて、その場所で何が起きたか、そして、それがなぜ、どのように起きたか、を博物館資料を通じて伝えようとしているこの場所は、死者への慰霊と共に存在する。

4 生き残りの人々の

記憶とつながる「博物館資料」

1945年8月6日の広島市に投下された原子爆弾のエネルギーは、熱線 35%、爆風 50%、放射線 15%であったと報告されている（広島平和記念資料館 2002：11）。その爆発の中心地の温度は、摂氏百万度を超え、その爆心地の地表温度は、およそ 3,000 から 4,000 度だったとされている（広島平和記念資料館 2002：13）。この爆弾の炸裂は、巨大な爆風を起こし、その中心地は、最大爆風圧 1 キロ平方メートルあたり 35 トン、そして最大風速は、秒速 440 メートルであった。

原子爆弾の投下直後、その投下地では、大量の人、街、社会機能、社会関係を失った。爆心地に生きていた人々と彼らの街は、一度に消されてしまい、多くの人々は熱線、火、爆風、放射線からの複雑な組み合わせからの多大な身体的な苦しみを受け、今もそれらは彼らに影響し続けている（広島平和記念資料館 2002：21）。その爆弾は、また、彼らの家族や友人たちの死、

彼らの住んでいた場所の喪失、彼らのアイデンティティの消失という深い精神的苦しみをもたらした。原爆投下後、混沌としている状況の中、原子爆弾投下から生き残った人々は、自発的に行動を起こし、彼らの記憶を彼ら自身で集め始めた。それは、被爆したものの収集と展示、原爆ドームの保存活動、被爆体験の証言活動などである。

例えば、1955 年の広島平和記念資料館の設立以前に、生き残りの人々や広島市民は、1949 年、市中央公民館で関連した被爆資料を展示した。それは、机や椅子の上に関連した物、例えば、屋根瓦や石であった（広島平和記念資料館 2002：108）（図 6）。設立さ



図 6 原爆参考資料陳列室（中央公民館）1949 年 9 月（広島平和記念資料館 1999：108）

れた資料館には、持続的に、広島の出来事に関連した資料が寄贈されている。寄贈された物には、個人の所有品、例えば懐中時計、弁当箱や洋服、また、人間の身体の一部、例えば皮膚、爪や髪、さらに「白の壁の黒い雨」、「石に投影された人間の影」などがある（図 7、8）。

例えば、「黒い爪」は、高橋昭博氏（被爆当時 14 歳）によって、寄贈されたものである（図 4）。この黒い爪は、高橋氏が被爆した時に、爆風で飛んできたガラスの破片を身体にうけ、右手人差し指の爪のはえ際にその破片が突き刺さり、それ以後、生えてくるようになったという。高橋氏は、「この爪で、原爆の恐ろしさを多くの人に伝えることができるのなら、やはり、積極的にならなければ」と述べている（高橋 1995：153）。

また、資料の中には、寄贈された折り鶴がある（広

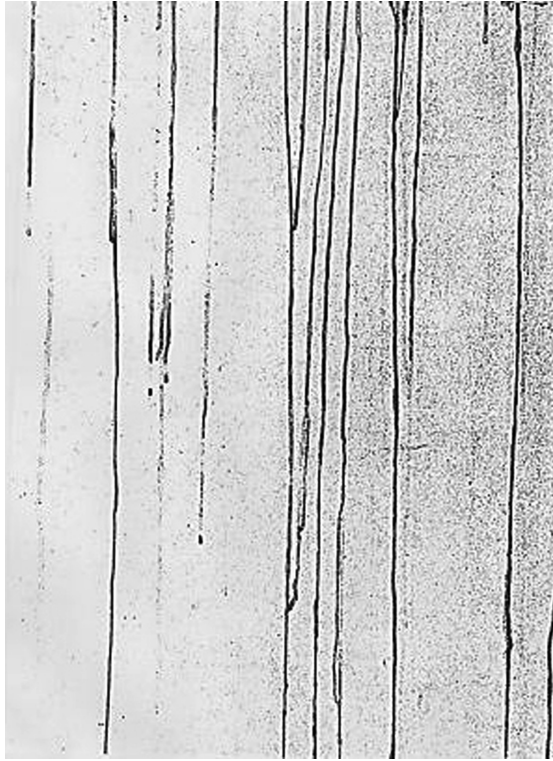


図7 白壁に残った黒い雨の跡（爆心地から3,700 m・八島秋次郎寄贈）（広島平和記念資料館 1999：71）

島平和記念資料館 1999）。この折り鶴は、被爆した小学生の佐々木禎子さん（被爆当時2歳）が病気発覚後、入院中、もし、千羽の鶴を折れば、将来病気は治ると信じて、薬の包み紙や包装紙などで折った鶴である（広島平和記念資料館 1999：76）（図9）。

この資料館には、多くの絵画も保存、展示している。1974年5月、小林岩吉氏は、下駄履きで、NHK広島を訪れた。当時、小林氏は、NHKの連続小説「鳩子の海」を見ていたら、被爆当時のことを思い出し、どうしてもある時、見たことを書き残さなくてはと思い、絵を描いたという（財団法人広島平和文化センター 1977）（図10）。その絵をきっかけにし、NHK広島は、朝のローカル番組で、「届けられた1枚の絵」を放映し、市民の手で、原爆の絵を残そうと呼びかけた。同年6月から8月の2か月間で975枚の絵が集まり、それから2年後には、2,225枚の絵が集まった。のちに、NHK広島から広島市へ寄贈され、さらに、広島平和文化センター（広島平和記念資料館の管理・運営組織）で、保存・展示されるようになった。これらの絵は、名前を明かさないもの、絵の大きさ、画材も様々であった。

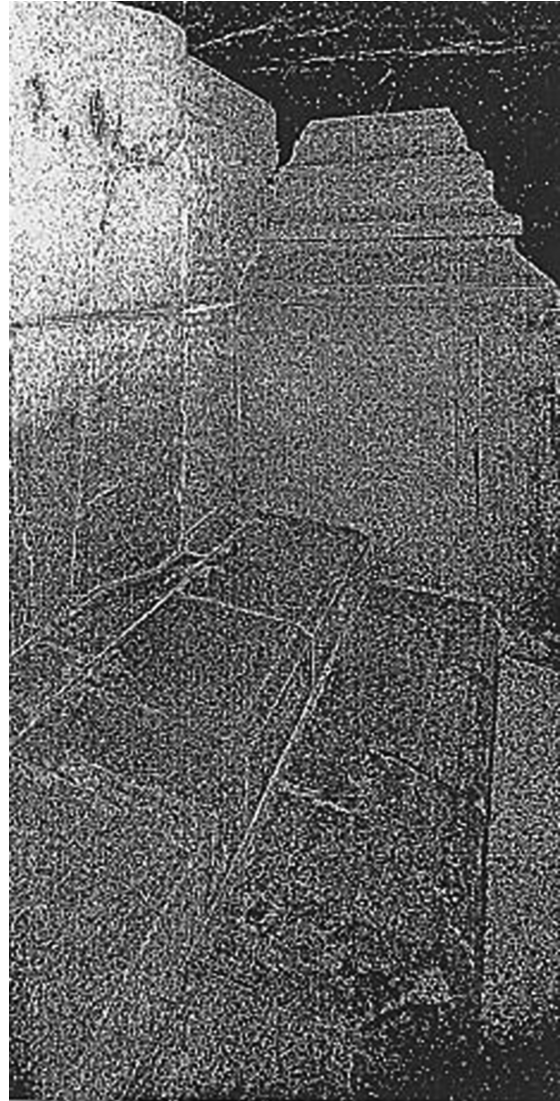


図8 人影が残った石（爆心地より260 m・住友銀行広島支店寄贈）（広島平和記念資料館 1999：57）



図9 折り鶴（空田寛美氏・幡生昌子氏寄贈）（広島平和記念資料館 1999：76）

こうして、生き残りの人々の個人の記憶は、文学、芸術、映画という媒体でゆっくりと表現されていく傍ら、この場所を通じて、彼らの記憶は、もはや個人的な記憶に留まらず、この場所を通じて社会の記憶として共有できることとなった。広島平和記念公園に集

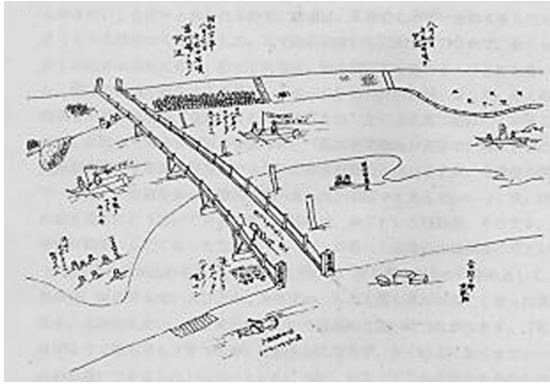


図10 小林岩吉氏の絵（日本放送協会1975:90）

められた多くの資料は、生き残りの人々が集め寄贈したモノを、平和を求める教育的役割や何が起きたかを伝えるだけでなく、博物館資料を通じて、生き残りの人々の思い、祈りや意思を伝えることができる。

5 結 語

多くの人々が、広島は決して、回復しないだろうと信じていた。広まったうわさでは、広島には、植物は75年間生えないだろうと言われていた（広島市平和記念資料館2002）。しかし、現在、広島市は、近代的そして国際的な市へと再建された。原爆投下の中心地として、この公園は、核兵器廃絶による平和の実現や死者への慰霊と強く社会関係を持っている。そして、同時に、生き残りの人々の記憶の中心地として、そこは、彼らの感情、悼みと悲しみ、そして希望とつながっている。

なぜ、生き残った人々は、自発的につらい記憶を、最も痛々しい記憶の残る原爆投下の中心地であるこの公園に集め、その記憶を様々な媒体を通じて、表現したのだろうか。また、なぜ、彼らの記憶は、周囲の人々によって、この公園に集められたのだろうか。ホロコーストの記念碑の論議に見られるように、「思い出すことは、病癖であり、一方、忘れてしまうことは治癒である」という言葉が存在する（Forty 1999）。忘却は、また、記憶をと同じぐらい大切なことであり、それは、私たちを保護し、助けるとも指摘されている（Kavanagh 2000:16）。

彼らには、痛みや悲しみに加えて、彼らの心から、個人的な記憶を抑制する要素は、いくつか存在したと考えられる。例えば、被爆による健康、結婚や職業に

関わる不安、心配や社会的孤独である。また、1945年9月から1951年、サンフランシスコ平和条約の終結まで、GHQによるセンサーシップにより、日本人の表現、調査活動、報告は、厳しく制限された（広島平和記念資料館1999:90 & 116）。

そのような状況でも、彼らが個人の体験の記憶を伝えようとした動機は、Sigmund Freud（ジグモンド・フロイド）の心の過程の理論によって分析されるかもしれない。同氏によれば、忘却は、心に受けた印象を曖昧にする自我を抑制することによって、克服することができるという（Forty 1999）。生き残った人々は、自分たちのことよりも、他の人一後世を生きる人や広島の外を生きる人にとって、何が必要かを考えることにより、彼らは、自我を超えることができたのではないだろうか。

今日、広島平和記念資料館は、すべての人に対話の場所として開かれている。しかし、外的、内的要素によって、資料館に集められた生き残った人々の記憶の形は、変容していくであろう。

近年、博物館で見られる触れる展示、映像展示やデジタル展示などの展示方法は、資料からより多様な情報を引き出すことに貢献している。触れる展示は、モノの重さ、手触り、冷たさや実感などの視覚では得られない情報をもたらすことができる。また、映像展示やデジタル展示も、モノについての情報を大量に、早く、動的にモノについての情報を来館者へ伝えることができる。それと同時に、非文字資料研究の一つとして、モノそのものに託されたヒトの活動、感覚や感情を明らかにしていく方法は、モノそのものをヒトからヒトへのかけがえのないメッセージとして存在させることができ、ヒトの心の風景を作り出す大切な方法だと私は考える。

参考文献

- Ambrose, Timothy. & Crispin Paine. (1994) *Some definitions of 'museum'*. pp. 15-16. in Gaynor Kavanagh (ed.) *Museum Provision and Professionalism*. London & New York: Routledge.
- Buruma, Ian (1995) *The wages of guilt: memories of war in Germany and Japan*. London: Vintage.
- Duffy, Terence. (1993) "The peace museum concept." *Mu-*

- seum International*. 177 : 4-8.
- Duffy, Terence. (1997) "The peace museums of Japan." *Museum International*. 196 : 49-54.
- Evans, Martin. & Ken Lunn. (1997) Preface. pp. xv-xi. in Martin Evan & Ken Lunn (eds.) *War and memory in the twentieth century*. Oxford : Berg.
- Forty, Andrian (1999) introduction. in *Andrian Forty & Susanne Kuchler* (eds.) *The art of forgetting*. Oxford : Berg.
- Hogan, Michael. (1996) Introduction. pp. 1-10. in Michael Hogan (ed.) *Hiroshima in history and memory*. New York : Cambridge University Press.
- Kavanagh, Gaynor (1996) Making histories, making memories. pp. 1-14. in Gaynor Kavanagh (ed.) *Making histories in museums*. London & New York : Leicester University Press.
- Kavanagh, Gaynor (2000) *Dream Space : Memory and the museum*, London & New York : Leicester University Press.
- Kawamoto, Yoshitaka. (1993) "The sprit of Hiroshima." *Museum International*. 177 : 14-16.
- Luber, Steven (1997) Exhibiting Memories. pp. 15-27. in Amy Henderson & Adrienne L. Kaepler (eds.), *Exhibiting Dilemmas*. Washington & London : Smithsonian Institution Press.
- Rotblat, Joseph (1998) A social conscience of the nuclear age. pp. xvii-ixxvii. in Kai bird & Lawrence Lifschultz (eds.) *Hiroshima's shadow ; writings of the denial of history and the Smithsonian controversy*. Stony, Creek, Connecticut : The Pamphletter'Press.
- Young, James (1993) *The texture of memory : Holocaust memorials and meaning*. New Haven & London : Yale University Press.
- 青木豊 (1997) 『博物館映像展示論——視聴覚メディアをめぐる——』, 雄山閣出版.
- 荒井信一・早乙女勝元監修 (1997) 『世界の「戦争と平和」博物館 1. ポーランド・ドイツ』, 日本図書センター.
- 石森秀三 (2003) 『改訂版 博物館概論』, 財団法人放送大学教育振興会.
- 井上ひさし 「人類史の「折り返し点」『the 座』第53号3項.
- 加藤有次 (1996) 『博物館学総論』, 雄山閣.
- 木原啓吉 (1982) 『歴史的環境——保存と再生——』, 岩波書店.
- 倉田公裕・矢島國雄 (1997) 『新編 博物館学』, 東京堂出版.
- 財団法人広島平和文化センター (1977) 『原爆の絵 HIROSHIMA』, 童心社.
- 財団法人広島平和文化センター (2002) 『平和文化』第147号.
- 高橋昭博 (1995) 『ヒロシマ いのちの伝言 被爆者 高橋昭博の50年』, 平凡社.
- 西尾隆昌 (1982) 『広島のにしぶみはみつめる 第1集』, 中国印刷株式会社.
- 西尾隆昌 (2000) 『広島のにしぶみはみつめる 第2集』, 中国印刷株式会社.
- 西田勝・平和研究室編 (1995) 『世界の平和博物館』, 日本図書センター.
- 日本放送協会編 (1975) 『劫火を見た——市民の手で原爆の絵を』, 日本放送出版協会.
- 広島平和記念資料館編 (1999) 『図録 広島平和記念資料館 ヒロシマを世界に』, 広島平和記念資料館.
- 広島平和記念資料館編 (2002) 『広島原爆被害の概要』, 広島平和記念資料館.
- モーリス・アルバックス 小関藤一郎訳 (1989) 『集合的記憶』, 行路社.
- 吉田憲司 (1999) 『文化の「発見」 驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』 岩波書店.
- (COE 研究員・RA)
- 〔2004年2月20日受理, 3月10日審査終了〕